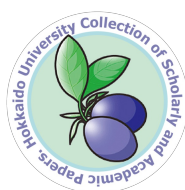




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中央アジアにおけるビジネス言語としてのロシア語：ウズベキスタンに焦点を当てて
Author(s)	徳永, 昌弘; TOKUNAGA, Masahiro
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 43-45
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.43
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94172
Type	journal article
File Information	JB19_009tokunaga.pdf



中央アジアにおけるビジネス言語としてのロシア語⁽¹⁾ —— ウズベキスタンに焦点を当てて ——

徳永 昌弘

ロシア語を共通のビジネス言語とするロシア語圏市場は、言語や移民を媒介にしたネットワーク型の経済圏の一つと考えられる。ロシア語にはビジネス言語としての機能性や経済性が広く認められる一方で、旧ソ連構成諸国が自らのナショナリティとアイデンティティを表現するために欠かせない国家語である基幹民族語との相克や、国際ビジネスの領域では英語との競合が見られる。本報告では、国際経営・ビジネス研究及び国際経済学の分野における言語研究の成果を踏まえながら、新制度学派の取引費用論や比較制度分析の制度的連結及び制度的補完性の議論に言語的要素を取り入れることで、1)「ロシア語頼り」の言語計画、2)「ロシア語離れ」の言語計画、3)「ロシア語雑居」の言語事情という3つの制度配置を概念的に提起した。上記の制度配置の中では3)のパターンが、国家主導性に基づく国家語とビジネス言語としての経済性に立脚したロシア語の相克を最も明瞭に映し出していることから、そのケーススタディとしてウズベキスタンの言語状況を検討した。

ウズベキスタンでは、英語と同様にロシア語は外国語の一つに過ぎない。キルギスやカザフスタンのように公用語ではなく、独立後には民族間交流語としての規定も削除されたため、この規定が一時期まで維持されたタジキスタンやトルクメニスタンとも状況は異なる。その一方で、首都のタシケントをはじめとする都市部では日常的にロシア語は使われており、国際ビジネスや外交の世界では英語よりもロシア語の方が優勢である。国外に目を向けると、対外経済面ではロシアへの依存度が一般的に高く、同国が圧倒的な地位を占める貿易構造に取り込まれているだけでなく、移民労働者の送り出しと海外送金の受け取りを通じて、ウズベキスタンの市井の人々の生活は「ロシア的なもの」と分かちがたく結びついている〔雲2010〕。移民労働者による海外送金のインパクトは、主要な輸出品目である天然ガスや金(ゴールド)よりも大きく、ウズベキスタンの「稼ぎ頭」と呼ぶ専門家もいる〔遊佐2021〕。現在のミルジョーエフ政権は為替や貿易の自由化路線へと舵を切ったため、輸入の急増に伴い貿易・

(1) 本報告は、徳永昌弘「国家主導性と経済性の相克——ウズベキスタンにおける国家語と共通通商語に焦点を当てて——」『スラヴ研究』69、2022年、115–135頁に基づく。

サービス収支の赤字幅は拡大しているが、これを埋め合わせているのが、主にロシアで働いている移民労働者からの海外送金である。さらに、ロシア向け経済制裁の発動によって登場したウズベキスタンへの「カードツアー」(ロシア国内では発行できない国際ブランドのクレジットカードを入手するための海外ツアー)を通じて、ロシア住民のマネーが大量に流れ込むことで国際収支が大きく改善したことも[ジェトロ 2022; 2023]、ロシア語を介して広がったビジネスの新たな一コマであると言える。

「ロシア語頼り」の言語計画はもとより、「ロシア語雑居」の言語事情においても、ロシア語を共通のビジネス言語として利用すれば、様々な局面において取引費用を低減させる効果が生まれると期待される。この点を確認するために、報告者は2019年2月及び9月にウズベキスタンの首都タシケントを訪れ、企業関係者、大学関係者、政府関係者などに対してヒアリング調査とアンケート調査を行った。国籍を問わず、調査対象者は基本的に英語話者とし、すでに国際ビジネスや国際協力に従事している実務家や研究者か、その可能性を秘めている大学生と、彼らの教育に従事している大学教員である。2020年秋以降に予定していた現地調査はコロナ禍で中止を余儀なくされたため、2021年3月に同じ内容のアンケート調査のみを再度実施した。

先行研究で明らかにされた史実に照らし合わせながら、上記の調査結果を吟味すると、次のような結論が得られる。第一に、ウズベキスタンではロシア語は外国語の一つにしか過ぎないが、いわゆる英語話者の間でも、ロシア語の機能性や将来性は高く評価されている。それゆえ、国際ビジネスの分野では、英語ではなくロシア語の方がビジネス言語としての役割を果たしている。第二に、ウズベキスタンを含めて、中央アジアの国々は独立前後から「ロシア語離れ」を政治的な理由から進めてきたが、ある時期を境にして、その方針を見直すようになった。その理由の一つとして、ビジネス言語としてのロシア語の機能性や経済性の高さが考えられる。第三に、経済的であるがゆえにロシア語の使用や浸透が職場やビジネスの現場で続いたとしても、ロシア語の法的地位を上げるような政治環境にない場合、政治と経済のドメイン(領域)間で言語面での制度的な補完性が成立せず、それゆえに言語政策が機能不全に陥ったり、言葉のあり方をめぐって社会が分断されたりする恐れがある。

ロシア語圏市場を越えてグローバルな市場環境に目を向けると、ビジネス言語としてロシア語を使い続けることは、長期的には取引費用の上昇をもたらさう。それゆえ、「ロシア語離れ」の言語計画は経済的に合理的で、かつ政治的にも受容されやすいという意味で、目指すべき究極の言語制度配置ではあろう。しかしながら、仮に将来実現するとしても、現在の状況を踏まえると、その目標の達成に至る道のりは長いだけでなく、政治的な揺れ戻しや経済的な混乱を伴うことが予想されるため、「ロシア語離れ」への長く険しい道程は、新しく構築される言語制度に関する主観的ゲーム・モデルの認知的均衡に基づいた一般的認知均

衡の状態へと至る単線的な進化過程ではない。むしろ、認知的不均衡が繰り返されることで制度的危機が潜伏するような状態を当面の間は伴いながら、「ロシア語雑居」の言語事情は長期にわたり続くであろう。ウクライナにおけるロシア語の位置づけや中央アジアにおけるアルファベットの選択を中心に、言葉のあり方をめぐり交わされる終わりのなき論争は、その蓋然性の高さを示唆している。

参考文献

- 雲和広 2010 「中央アジア地域の人的資源と社会状況」堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房、3-30頁。
- 遊佐弘美 2021 「ウズベキスタンの稼ぎ頭は何か——国際収支からみた外貨獲得源——」『海外投融資 (JOI)』2021年1月号、48-52頁。
- ジェットロ 2022 「2022年上半期のウズベキスタン向け国際送金、前年同期比2倍に(ウズベキスタン)」ビジネス短信 2022年7月26日。
- 2023 「ウズベキスタン経常収支、対ロシア金融制裁などで赤字が縮小(ウズベキスタン)」ビジネス短信 2023年2月21日。

(関西大学商学部)